思い出の中の保育(6)

〝人とのかかわり〟の難しさ

守永　英子

新しい教育要領では、〝人とのかかわり〟が、大きな柱の一つとして取りあげられるようになった。小さな子どもたちにとって、〝いかに人とかかわるか〟は、早い時期から出合う課題であると同時に、大人になっても、乗り越えていかなければならない、いつまでも続く課題である。そして、生活の中で、それをどのように体験していくかが、その力を育むことにつながっていく。といっても、生活の中の具体的な場面で、〝人とのかかわり〟をどのように捉え、どのように育てるかは、複雑多岐にわたっていて、そう簡単なものではない。

家庭から幼稚園に入園してくる子どもたちに対して、保育者としては、その初期の出会

いが、子どもにとって心楽しいものであってほしいと心を砕く。子どもが安心して、思うことができるように支え、子どもの中に、大人は自分を支えてくれるものだという信頼感を根づかせたいし、子ども同士の関係の中では、お互いの気持ちが伝わり合ってうまくいくように援助して、互いの触れ合いが快いものであることを体験させたいと願う。しかし、保育者がどんなに願っても、どうにもしてあげられない状況もある。

三歳児クラスでのこと、昼食のあとで、子どもたちのほとんどは、庭に出て行って、保育室の中は閑散としていた。M子は、部屋のままごとコーナーで遊び始めようとしていたが、誰か一緒に遊ぶ相手が欲しかったのであろう。保育室の入口に、N子とY子の二人の姿を見つけ、とんで行った。Y子は、M子がよく一緒に遊ぶ相手である。M子は大喜びでY子の手を引っぱって、「Yちゃん、おままごとしようよ」と言った。N子は、慌ててY子の手をしっかりと握り、M子の手を振り払った。「だめ、Yちゃんと一緒に、お山に行くんだから」

園では、庭に続いて小高くなっているところをお山と呼んでいて、庭から山へは、植え込みの間の道を通って自由に行けるようになっているが、不思議と、子どもたちは、「お山に行ってきます」「お山に行ってもいいですか」と、ことわって行くことが多い。N子とY子も、「お山に行ってきます」と、ことわりにきたところであったらしかった。そこへM子の割り込みに会って、N子は激しく抵抗し、二人でY子を引っぱり合い、叩き合いになった。Y子は、二人の間で、困惑の表情で立ちすくんでいた。

子どもたちのおべんとうの後始末をしながら、事の成り行きに気づいていた私は、何とかしなければ……という思いに焦った。

M子とN子は、二人とも、はっきりした、強さをもった子どもたちである。一方、Y子は、おっとりした、やさしい子どもで、二人が、自分の遊び相手としてY子を選ぶのも、もっともと思えた。

どうしたらよいだろうかと思案しながら、私は、ゆっくりと三人に近づき、Y子に尋ねた。「Y子ちゃんは、どこで遊びたいの？」

M子とN子には、Y子にもY子自身の気持ちがあることを知って欲しかったし、Y子には、自分の気持ちをはっきりと表現して欲しかった。「誰と遊びたいの？」という問いでは、選ばれなかった子どもの気持ちが傷つくと思うと、私には、Y子に場所を選ばせるより他の問いは、思いつかなかった。

「おそとで遊びたいの」　Y子は少し困った様子で、しかし、はっきりと答えた。N子は喜んで「じゃあ、お山に行こう」とY子を誘い、M子は、「もう、お部屋にきても、おままごとには入れてあげないから」と憤った。

二人が庭に去ったあと、M子は、ままごとコーナーに戻って行ったが、怒りは、なかなかおさまらなかった。

おそらく、私が、ままごとの相手になってあげたとしても、怒りはおさまらないに違いないし、何か声をかけることが、かえってM子の怒りを活性化させてしまうことを恐れ

て、私は、黙って昼食のあと始末を続けながら、じっと、N子の怒りがおさまるのを待った。

ひとりっ子で、今まで自分の思い通りになることが多かったと思われるM子には、少し厳しすぎる試練かもしれなかったが、私には、何もしてあげることはできなかった。できることは、ただ、憤っているM子の怒りがおさまるまで、一緒にいてあげることだけだった。

激しい怒りの中で、M子は、何を体験しただろうか。Y子は……N子は……。

三人の子どもたちそれぞれに、私の思いが通じたであろうか。

保育の中の小さな一つの出来ごとの体験が、その子どもの中にどのように結果したかは、定かではない。しかし、幼稚園期を終わる頃の、明るい、のびのびとした生活、友だちとの触れ合いを目にするとき、一こま一こまの体験が、子どもの発達にプラスしてきたことの確信が、やっと持てるような気がするのである。

（元・お茶の水女子大学附属幼稚園）